

突発的事象が行為系列実行時の反復エラーに及ぼす影響

問題・目的

私たちの日常生活では、行為系列の実行中に、突発的に別の事象が生じると、既に実行した単位行為を再度実行してしまう反復エラーが発生することがある。従来の研究では、突発的事象が反復エラーの要因となることが指摘されているものの、そのメカニズムを明らかにした研究はない。そこで、本研究では、突発的事象によって生じる行為系列の処理方式の切替が反復エラーにつながるという仮説を立て、突発的事象が反復エラーの要因となるメカニズムの検討を行う。

方法

18名の大学生・大学院生が個別に実験に参加した。そのうち17名（男性4名、女性13名、平均年齢 = 21.12歳、 $SD = 1.36$ ）について分析を行った。実験は、学習、実行、モニタリングの3段階で構成されていた。学習段階では、行為事象文10項目を繰り返し提示し実演させ覚えさせた。実行段階では、覚えた行為事象文を思い出させて実行させた。モニタリング段階では、学習した行為事象文10項目と学習していない行為事象文10項目を提示し、学習したか、実行したかを回答させた。実験は、学習方法2水準×挿入課題の有無2水準の2要因実験参加者間計画であった。学習方法は2種類であり、学習段階において、反復する順序が一定である群と、ランダムである群を設定した。実行段階において、行為系列実行中に別の課題を挿入する群と、挿入しない群を設定した。

結果・考察

実験の結果、突発的事象が発生した場合において、発生しない場合よりも反復実行率が高く、反復エラーが多かった。実行項目数においては、突発的事象の影響は見られず、行為系列の処理方式の影響のみが見られた。また、モニタリング段階の正答率は全体的に高く、条件間の有意差は見られなかった。これらの結果は、突発的事象によって行為系列の処理方式の切替が生じるという仮説を支持するものではなかったが、突発的事象が反復エラーの要因となることを示唆するものであった。

演劇鑑賞経験と鑑賞の視点の関連性

問題・目的

演劇を構成する三要素と一般的に言われているのは、脚本、俳優、鑑賞者である。脚本をもとにした考察や俳優の演技法などの研究は多く存在するが、鑑賞者の研究は少なく、演劇研究において創作に関わっていない鑑賞者からの視点の研究は行われたことはない。舞踊研究では鑑賞者の視点に関する検討が行われており、鑑賞者の視点に関する尺度が作成された研究も存在している。鑑賞者は台詞と台詞以外の表現も含めた表現の中でできるだけ多くの情報を拾い集約する。そして、鑑賞者は舞台上で表現されたものに情動が動かされたり、何らかの価値や意味を見出したりする。鑑賞経験が多ければ気づきを得る機会も多いと考え、本研究では、演劇鑑賞時に鑑賞者が着目している部分がどの程度かを示す演劇鑑賞視点尺度を作成し、演劇鑑賞経験の多さと演劇鑑賞視点の関連性について検討することを目的とした。

方法

劇場での演劇鑑賞経験がある 118 名へ調査を実施した。内 1 名のデータは除外した 117 名を分析対象とした（平均年齢 23.69 歳， $SD = 6.22$ ）。

調査においては、年齢と、演劇鑑賞経験に関する質問 11 項目と演劇鑑賞視点尺度 50 項目を尋ねた。教示文は、「演劇を鑑賞している際に、価値をおいていたり気にしていたりすることをお聞きます。項目ごとに最も当てはまる選択肢を選択してください。」とし、5 件法で尋ねた。本調査は Google フォームを用いて無記名で行われた。統計解析には IBM SPSS Statistics 26 を使用した。

結果・考察

演劇鑑賞視点尺度 50 項目に対して最尤法でプロマックス回転による因子分析を行った。その結果「俳優への着目」因子、「作品理解への着目」因子、「体験への着目」因子の得られた 3 因子構造が確認された。また、Ward 法によるクラスタ分析を行った結果、ある程度広い視点をもつ「受動的演劇鑑賞」群、演劇鑑賞視点幅広い「総合的演劇鑑賞」群、関心が低い「消極的演劇鑑賞」群に分類された。「受動的演劇鑑賞」群より「総合的演劇鑑賞」群の方がよく鑑賞する演劇の「客席数」が少なかったことから様々な視点が取れる鑑賞者ほど、大きな劇場での鑑賞を行う可能性が示唆された。一方で、鑑賞経験回数では群間の差が認められなかったことも、もっとも演劇鑑賞に対して消極的な姿勢を持つと考えられる「消極的演劇鑑賞」群が「総合的演劇鑑賞」群よりも鑑賞頻度が高いことなどから、演劇鑑賞視点の関連性については、本研究における仮説を支持する結果は得られなかった。